

朝鮮人軍夫の沖縄戦

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 駿台史学会 公開日: 2009-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 海野, 福寿 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/6077

朝鮮人軍夫の沖繩戦

海 野 福 寿

私は昨年三月から今年三月まで一年間（一九八六年度）、ソウル大学校経済研究所客員研究員として韓国に留学いたしました。

留学目的は韓国語の学習と日帝植民地時代の地方農村の実態調査。出発時に明治大学に提出した申請書に書いた研究テーマは「一九二〇・三〇年代の韓国農村・農民・労働者の社会史的研究」でした。韓国語の勉強は延世大学校韓国語学堂に通ったり、家庭教師に教わったりしたのですが、本来の留学目的である農村調査の方はうまくいきませんでした。というのは、地方史料が極めて少ない。地主文書などはいくら残っているようでしたが、いわゆる役場文書はほとんどありません。聞くところによれば、以前に日帝時代の史料を保存すべきか、廃棄すべきかをめぐる論争があり、その結果、廃棄説が勝ち、文書を徹底的に廃棄したとのこと。その上、私たちのいわゆる地方史という考え方も熟していない。最近、若手研究者の間に反日独立闘争の地方史的研究が進んでいるようですが、地方政治史や地方経済史の分野の研究はまだまだといった感じ。地方自治が未確立のこの国の行政制度も反映しているのかも知れません。

そんなわけで、地方実態調査計画が行きづまっていた頃、嶺南大学校教授で韓国経済史学会々長の権丙卓教授の紹介で慶尚北道慶山郡の「太平洋同志会」の人たちにめぐり会ったのです。

「太平洋同志会」というのは、一九四四年（昭和一九）六月、「国民徴用令」という最強権を伴う勅令によって徴発され、「軍夫」という名の軍務雑役労働者として沖繩へ送りこまれた、慶山郡出身者の生き残り二百数十人により、一九四六年一月に結成された旧友会であります。寄る年波には勝てず、一人欠け、二人欠けて現在の会員数は七、八十人。毎年四月、亡友の慰霊のため会員一同が集まっておられます。皆さんは三・一独立運動（一九一九年）の頃のお生まれなので、もう七〇歳くらいになられます。

今日は彼らの戦争体験についてご報告したいと思いましたが、その前に、日帝の朝鮮植民地に対する兵員・労働力動員について概略を述べることにします。

朝鮮に徴兵制が施行されるのは、戦争も末期を迎えた一九四四年のことです。朝鮮人に無差別に銃を持たせることについて不安があり、実施は延引されていたが、陸軍の主導で徹底した皇民化政策の後に徴兵制施行が決定された、といわれています。解放（日本の敗戦）時に軍人だった朝鮮人は第1表にみるように二〇万九千二百七十九人。その大部分は徴兵制により徴発された兵員と推定されます。ただし全員がそうではなく、実は一九三八年度以降、朝鮮では陸軍特別志願兵制度が実施され、また一九四三年度に海軍特別志願兵令も公布され、四三年度までに累計一万七千六百四十八人がそれに採用されていますから、志願兵制度により軍人となった人も含まれているはずですが。

このような軍人のほかに、軍属として日本軍籍にあった朝鮮人がある。前掲表によれば、敗戦時現員は一五万四千九百七十九人に上ります。また、第2表によれば、日帝の朝鮮人軍要員（軍属）の徴発は一九三九年から始まり、四五年ま

第1表 朝鮮人軍人・軍属の復員・死亡調査

	復員	死亡	計	敗戦時現員
陸軍	軍人	5,870人	94,978人	186,980人
	軍属	2,991	48,395	70,424
	計	8,861	143,373	257,404
海軍	軍人	308	21,316	22,299
	軍属	13,013	77,652	84,483
	計	13,321	98,968	106,782
合計	軍人	6,178	116,294	209,279
	軍属	16,004	126,047	154,907
	計	22,182	242,341	364,186
			その差 121,845 ?	

内海愛子・村井吉敬『赤道下の朝鮮人叛乱』, 厚生省資料より作成。

でに一四万五〇一〇人。その中には捕虜収容所の監視要員に使役された人も多数います。数年前の映画「戦場のメリークリスマス」(大島渚監督)で、ビート・タケシが演じた原軍曹に処刑された朝鮮人軍属カネモトのような人です。彼らの中には戦後、捕虜虐待の罪を問われて連合軍に裁かれ、処刑された人もいます。

もう一度第2表に戻ると、軍要員徴発は一九四一年からは国民徴用令による徴発も加わり、徴兵制が実施された四四・四五年には、大量の人員が動員され、日本内地・南方その他へ送られ、軍務雑役に従事させられたことが分ります。「太平洋同志会」の人たちは、この表の四四年の欄、「徴用令による被徴用者」三万六二六人の一部に当たるわけです。

ともかく、敗戦時に約二二万人の朝鮮人軍人と一五万人余の朝鮮人軍属があり、合計三六万四一八六人が日本の軍籍に属していた、と推定されます。あるいは昭和二〇年度『朝鮮年鑑』には、軍人・軍属数四九万六〇〇〇余人と記されています。しかも、ここには朝鮮人慰安婦は含まれていないと思われれます。これは、七〇万人とも、八〇万人以上ともいわれる、いわゆる強制連行朝鮮人労働者数とくらべても決して少ない数ではありません。一九四四〜四五年当時、日帝は徴兵適齢者の朝鮮人を軍人として徴発し、残る二〇歳代の若者を軍属として連行した、と言っても過言ではないでしょう。

第2表 軍要員として徴発された朝鮮人

	軍要員 被徴発者	うち徴用 令による 被徴発者	連 行 先				
			内地	南方	朝鮮内	満州	中国
1939年	145					145	
40	736		65			656	15
41	16,027	4,895	5,396	9,249	1,085	284	13
42	22,396	4,006	4,171	16,159	1,723	293	50
43	12,315	2,989	4,691	5,242	1,976	390	16
44	45,442	30,626	24,071	5,885	13,575	1,617	294
45	47,949	41,826	31,603		15,532	467	347
計	145,010	84,342	69,997	36,535	33,891	3,852	735

大蔵省「日本人の海外活動に関する歴史的調査」より作成。一部誤植訂正。

ところが、これらの朝鮮人軍人・軍属が敗戦後どうなったか、と言うと、分らないことが非常に多い。第1表に掲げた、日本政府発表の朝鮮人軍人・軍属の復員者は二二万一五九人、死亡者は二万二一八二人、合計二四万二三四一人とされています。とすれば、さきに敗戦時現員数とした三六万四一八六人から差引いた一二万一八四五人はどうなってしまったのか。『朝鮮年鑑』のいう四九万六〇〇〇人との差約二五万人はどこへ消えてしまったのか。いかにも日本政府の調査の杜撰さを指摘せずにはおられません。日韓条約で彼らに対する補償一切を打ち切った現在では分らずに、束のまま捨てられているのが現状であります。

一方、私たち日本近代史研究者の太平洋戦争史研究の面でも、内海愛子さん・村井吉敬さんの『赤道下の朝鮮人叛乱』（一九八〇年、勁草書房）、内海さんの『朝鮮人BC級戦犯の記録』（一九八二年、勁草書房）など、ごく一部の研究を除けば、まるで落丁のように朝鮮人軍人・軍属の問題はすっぱり脱け落ちていきます。

被害者である韓国側にも、この問題の研究書・体験記などはほとんどない。人びとの歴史意識の根底に植民地体験はどっかり腰をすえているけれども、その極限状況だった戦争は、受難者の立場から被害の実態を通して扱えられていません。

語るのもいまわしく、語り尽せないほど深い傷痕をもっているためかも知れません。韓国人の植民地時代の歴史記述は、日帝支配の暴虐や日本人の蛮行を描いても、自分たちの惨状については封印しているように見受けられます。そういう状況の下で、「太平洋同志会」の人たちは、勇気をふるって自らの体験を語ってくれたのでした。私たちは、彼らの血を吐くような証言に耳を傾け、太平洋戦争史の空白を埋めるとともに、日本人としての戦争責任を考えたいと思います。

慶尚北道慶山郡に暮らす若者たちの許へ、国民徴用令の「白紙」が届けられたのは、一九四四年六月中旬のこと。当時の戦況は、六月一五日米軍サイパン島上陸（七月七日守備隊玉砕）。六月一九日マリアナ沖海戦、日本海軍壊滅的打撃を受ける。七月米軍グアム、テナアン島上陸。七月一八日東条内閣総辞職等々。

次期戦場が東シナ海域であることも確実視され、沖繩防衛の第三二軍の兵力が増強されようとした段階で、日本政府・軍部が本土防衛の捨て石とした沖繩へ、朝鮮の若者たちを送りこむことを企んだのであります。

朝鮮総督府から慶尚北道へ通達された徴用人員は約三〇〇〇人。さらに道から慶山郡へ割り当てられた人員は三〇〇人余り。これを面（村）に割りふり、各面長（村長）らが二〇歳代の青年名簿からえらんだ、といます。

有無を言わせぬ徴発・連行です。官憲一体の人狩りで、ある人は「ちょっと面事務所（村役場）に用事ができたので」とだまされ、ある人には「割のよい仕事がある」と甘言が投げかけられた。忌避・逃亡のおそれのある者は嚴重に監視され、脅迫されています。

誰もが破局に瀕した戦場へ送りこまれることを恐れていたのです。それでなくとも、収穫物のほとんどを供出させられた上、連年の凶作で農民は塗炭の苦しみの中にやっと生きていました。皆、田植えの最中、土足のまま引っ張ら

れたり、寝込みを襲われて連れ去られたりして、拒否、逃亡は絶対にできませんでした。

慶山郡では、青年二十七人が「決心隊」を結成、竹槍や鎌を持って山頂に籠城。徴用令発動に抵抗する、という「事件」さえ起きています。

六月二四日、彼ら「応徴士」（被徴用者）たちは、慶尚北道の道都である大邱^{テグ}へ集められました。形だけで不合格者なしの身体検査の後、軍服、軍帽、軍靴などが支給され、翌日から練兵場や宿舎となった師範学校で基礎訓練が始まります。「前へ進め！ 回れ右前へ」、日本語による自己申告、「皇国臣民の誓詞」暗唱、「君が代」斉唱、軍歌練習等。農事にいそむだけで、ろくな教育を受けたことのない彼らがうまく出来るわけがない。日本語の意味は分らない。失敗するたびに日本人分隊長、班長の平手が頬に鳴った。

彼らが配属された部隊の正式名称は「特設水上勤務中隊」といいます。一個中隊が七〇〇人前後で、慶尚北道出身者で第一〇一中隊、第一〇四中隊まで四個中隊が編成され、後に宮古島・徳之島・沖繩本島へ送られます。「太平洋同志会」の人たち、つまり慶山郡出身者は第一〇三中隊第二小隊および第三小隊に属します。

別れを惜しむ暇もなく、夫や息子と引き裂かれた家族たちは、宿舎の師範学校の塀の外に群がり面会を求めたそうです。だが、日曜日でも面会は許されなかったばかりか、塀にとりすがって泣き叫ぶ人びとを騎馬兵が馬蹄にかけ、憲兵は軍用犬をけしかけたといっています。

七月二三日出勤命令が下る。出勤の知らせを聞いて街道沿いに集まり、悲痛な叫び声をあげる家族たちと一語を交すことも許されず大邱駅へ。誰もが「北」へ行くことを願っていました。「南」では米軍がサイパン島に上陸し交戦中。海は火に包まれていると聞いていたからです。しかし、期待を裏切って、彼らに乗せた貨車は南を指しました。釜山へ。

朝鮮海峡を渡って下関港で下船。逃亡防止の厳しい監視の下で一週間ほど訓練を受けた後門司へ移動。七月三〇日貨物船改造の大徳丸という船につめこまれて出航。九州西海岸を南下して着いた鹿児島港で下船の望みも打ち砕かれ、八月五日朝、軍艦や飛行機に援護された輸送船団に編成されて再出発。一路南下します。

蚕棚のように仕切られ、四肢を伸ばす余地のない空間に閉じこめられた彼らの船は、奴隸船と呼ぶにふさわしい。船内は家畜小屋のように蒸れ、小窓から流れ込む空気を争って吸わなければなりませんでした。その上、潜水艦攻撃を避けて蛇行する船の揺れで、船酔いが疲労を倍加させ、食欲さえなくなりました。やっとの思いで八月一〇日那覇に着。

一〇日間もの奴隸船の船倉生活で、上陸しても病犬のように足がふらつくというのに、彼らはその日から働かせられました。埠頭に陸揚げされた資材、荷物の運搬作業で、食事も与えられずに翌朝まで続けられたのです。

那覇は、それまで聞いたこともない所でしたけれど、上陸地が激戦中の南太平洋の島ではなく、日本「本土」の一角であったことに、かすかな安堵の息をついたのでした。

那覇での軍夫たちの主な作業は、那覇港の荷役作業と物資の運搬です。「水上勤務中隊」という名称もそれを意味しているように思われます。船から荷物を陸揚げし、それを倉庫や施設に運ぶ作業。分解した砲を高射砲陣地へ担ぎ上げたこともあったそうです。

終日の労働が易しかったわけではないけれども、彼らの苦痛は作業よりも飢えとのたたかいでした。飯盒はんごうの蓋一杯のメシを三人で食べ合う分量では、空腹と疲労が肉体をさいなみます。骨が浮き出た腕をふるい、鉛を流しこんだような重い脚をひきずっての果てしない労働のある日、Tという軍夫が、包装の破れ目から罐詰一個を取り、ポケット

に入れようとして発見されました。

日本人分隊長は、分隊全員に命じてTを一発ずつ殴打させた。左頬への「気合い」が一巡し、右頬へ移って間もなく彼は気絶して倒れた。痙攣を起こしてどこかに運ばれた彼は、再び同僚の前に姿を現わしませんでした。こぼれ落ちていた食べ物ひとかけらを拾っても、同じような処罰を受けたのです。軍規を乱した、というのです。

「十・十那覇大空襲」にもあっています。これは一九四四年一月一日、アメリカ太平洋艦隊第三八機動部隊から発進した、延べ千数百機による五波にわたる空襲で、軍事施設・武器弾薬・物資・市街地が一日にして灰燼に帰した空襲です。その概要はすでに知られていますが、朝鮮人軍夫の被害は明らかではありません。

那覇大空襲は、その後の本土大空襲に比べると、物的被害の膨大さに比して人的被害は軽少のように思われます。防衛庁防衛研修所戦史室編『沖縄方面陸軍作戦』（戦史叢書）によると、民間人死者三三〇人、軍人・軍属戦死二一八人。ただし同書は「陸軍関係の人夫約一二〇名が死亡し、約七〇名が負傷した」と述べています。ここでいう「陸軍関係の人夫」が朝鮮人軍夫だったと断定はできないものの可能性は大きい。そうだとすれば空襲犠牲者の中で朝鮮人の占める比率は高い。空襲下でもっとも危険な作業をさせられていたのではないか、と思うのです。

軍夫たちは空襲にも無事だったことを故郷に知らせる手紙を出すことも許されず、焼け跡整理、復旧作業に追い立てられていたのですが、一九四四年末、部隊移動のうわさが流れました。徴発されてから半年たつので帰国かと喜び、靴に手をかける人もいたが、ある晩、漁船に分乗して運ばれたのは那覇から西へ四〇キロメートル離れた海上に浮かぶ慶良間諸島でした。第二小隊が阿嘉島・慶留間島、第三小隊が座間味島。渡嘉敷島へは第一〇四中隊の一小隊が配置されています。

島での軍夫の仕事は、①とよばれた陸軍特攻艇の秘匿壕（掩蔽壕ともいう）掘りと特攻艇の泛水（出撃艇を海に浮

かべる)作業です。

沖繩守備軍は米軍の本島上陸を予想し、米機動部隊が本島に接近してきたとき、その背面から特攻奇襲攻撃を加える作戦をたて、慶良間諸島に特攻艇を配置していました。この特攻艇は長さ五・六メートル、ベニヤ板製のモーターボートで、艇後部に一二〇キログラムの爆雷二個を積み、敵艦船に肉薄して爆雷を投下するというもの。阿嘉島(慶留間島を含む)と座間味島にそれぞれ一〇〇隻ほどありました。

軍夫たちは、座間味島では国民学校校舎、阿嘉島でははじめ野宮、のちに仮小屋を作り、そこに寝起きして海に面した崖にのみを立て、つるはしを振って秘匿壕の洞窟を掘り、山から木を伐り出して杭木とするなどの作業に従事していました。米軍の沖繩来攻間近し、と予想されると、作業は昼夜兼行でピッチがかけられたが、食糧事情の悪化、栄養失調、マラリア病の蔓延などで衰え切った身体では作業能率が上らず、監督の日本兵をいら立たせたといえます。

ところが米軍は日本軍の作戦の裏をかくように、沖繩本島上陸に先立って慶良間諸島にまず集中攻撃を加える。

一九四五年三月二三、二四日の艦載機による連続空襲につづいて、二五日には水平線が見えなくなるほど海上を埋めつくした大艦隊からの艦砲射撃も加わりました。対空砲火をもたない日本軍は、敵機の跳梁をほしのままにさせるほかに、各島の軍事施設は破壊され、集落は焼き払われました。兵隊も島民も、空と海からの挟み撃ちに対して、洞窟にひそんで砲撃を避け、島を包んだ炎から逃げまどうばかりでした。

三月二六日、米軍は阿嘉島・慶留間島・座間味島に上陸。日本軍のわずかばかりの抵抗を排除して島を制圧し、二七日上陸の渡嘉敷島をあわせ、二九日に慶良間列島占領を宣言する。

算を乱した日本軍は、洞窟に隠れ潜むか、岩陰を伝って山間に敗走し、特攻艇は空襲や艦砲射撃で破壊され、残っ

た艇も出撃の機会を失って自爆・自沈するほかなかったのです。

「太平洋同志会」会長の千澤基チヨン・テクキさんは、座間味島の第三小隊第二分隊に所属していた。彼は二六日を山麓の大きな洞窟の中で日本兵、島民、同僚とともに過ごしたのですが、砲声が遠のいた夜になると、日本人将校から再起のため山上へ集合するように命じられたのです。だが、千さんら軍夫数人はそれを無視して近くの秘匿壕に隠れました。米軍が上陸した瞬間から、死の道連れにしようとする日本軍人と朝鮮人軍夫との間に無言の戦いが始まっていたのです。

やがて千さんらが隠れていた秘匿壕に、正装した若い特攻隊員が現われ、特攻艇を泛水しろ、と言うので、命じられたとおりにすると、東北の空に敬礼してから操縦席に飛び乗った彼は、「軍夫たち、気を付けろ」と言いざま装置をたたいたのです。物凄い爆発音とともに天地が揺れた。少年特攻隊員が艇もろとも自爆したのでした。一帯は焰に包まれ、硝煙が軍夫を襲ったのです。素早く身を伏せた千さんは命を拾ったが、同僚四人が巻き添えをくいました。

気をとり直し、生き残った同僚八人とともに山に登ることにしました。しかし朝から何も食べていなかったので、まず食料を入手することにして日本軍の糧秣壕へ行っただけです。そこへ辿り着いて壕内に入った時、地獄を見てしまった。家族らしい集団が向かい合って座り、互いに首に縄をかけ、くびり殺し合い、果てていたのです。血にまみれ、散乱した暗れ着の中で生きていた女が言いました。

「兵隊さん、私たちはこうしなければなりません。どうかそのまま行って下さい」

隣のもうひとつの壕でも、別の家族の自決死体が重なっていた。主人らしい男は、首筋をかき切って死んでいる。その傍で三歳くらいの子どもが泣きもせず立っているのです。千さんらは胸をつかれる思いがしたけれど、連れて行

くわけにもいかないのでその場に残し、壕を離れました。

総数三〇〇人とも言われる座間味島の集団自決の一部だったのでしょう。集団自決は軍命令による、という説もあるけれども、憤死することはあっても、絶望から自殺することはなく、粘りに粘って生き残る道を探す朝鮮人の心性からすれば、それは狂気の沙汰としか言いようがありません。老いた親をなぐり殺し、子どもを絞め殺すことが、どうして国のためなのか、理解できない。千さんは、今でもそう思っています。

千さんらは、廃墟となった集落に立ち寄っていくらかの食料を入手し、二日ほど洞窟で過ごし、別の安全そうな壕へ移ったところで、もう会えまいと思っていた同僚二〇余人と合流。また穴居生活を続け、夜は食料探し。木の芽、雑草、ヤドカリ、ヤシガニ等、食べられるものなら何でも拾い集めて生命をつないでいました。

そのうち米軍から投降を呼びかける放送が繰り返され、宣伝隊の中にはすでに米軍の捕虜となっていた親しい同僚の姿も見えた、という人もいます。「山を下りよう」（投降の意）という声も高まりました。でも慎重な千さんは迷っていた。捕虜の身分保障を案ずるより、日本軍の敗残兵に見つかることを恐れたからです。

しかし、千さんも「下山」を決心します。三七人の同僚とともに四月二五日の朝、西海岸の崖で落ち合う計画を立て、前夜、二手に分かれて脱出し、計画どおり集合地点に集結しました。海上から米軍に発見されるのを息がつかまる思いで待つこと数時間。ようやく発見された時は、日本人分隊長から教わった「アイ、コリアン」を絶叫したといいます。

無事救出されて、ランチで座間味キャンプに収容されたのは四月二六日。米軍上陸からちょうど一カ月後のことでした。

千さんら座間味島の軍夫たちが無事脱出できたのは、四月一〇、一二日の掃討戦で日本軍が壊滅的打撃を受け、部隊解散指令が出ていたためでもあります。その点では戦隊本部を残していた阿嘉島では（八月二日投降）、軍夫たちがいつまでも軍の統制下におかれ、悲劇を生む結果となります。

米軍上陸の三月二六日夜、島の中央高地に集められた軍夫たちは、手榴弾を渡され、阿嘉部落の米軍陣地へ突撃を命ぜられました。

「太平洋同志会」幹事の沈在彦さんシム・ザエオンもその一人でした。軍夫隊が手榴弾攻撃を行い、米軍陣地が混乱したら、別行動で陣地に接近した兵隊たちも攻撃を始め、米軍を挟み撃ちにして全滅させるといふ子どもじみた計画です。

それまで朝鮮人軍夫は武器を渡されたことはありません。彼らが武器を持つことを日本軍が恐れていたためです。渡嘉敷島の赤松戦隊長は座間味島の梅沢戦隊長に「朝鮮人には武器を渡すな。米軍上陸の場合は朝鮮人を皆殺しにした方がよい」と連絡していたことを伝令兵だったS氏が証言しています。

さすがにこの無謀な計画は実行されませんが、軍夫を危険な先鋒隊として敵前に差向け、手榴弾だけで肉弾戦を強いることは皆殺しにひとしいことです。

沈さんは、軍夫頭の宮田清次郎（創氏名）を隊長とするグループに入って山を下りかけたが、途中で僚友と相談しませんでした。それに気付いた宮田は、沈さんの名前をあげ、「逃げる気か、明日は銃殺だ」とわめいたため、その声めがけて機関銃が集中したのです。死傷者を出した宮田隊の進退はきまります。宮田は同僚二十数人に集団自決を強要し、自ら「天皇陛下バンザイ」と叫んで手榴弾で爆死。その巻き添えで三、四人が死傷しました。宮田は日本人に取り入り、日本人を真似たあわれな青年だったのです。

逃亡した沈さんらは、寄り集まった同僚と廃坑にこもったが、日本兵に山上陣地へ連れ戻されました。そこでは持

久戦に備えるため、陣地壕を構築する計画がたてられており、早速軍夫たちはその作業に追い立てられます。逃亡を防ぐために嚴重に監視され、差別的に少量の食料しか与えられずに終日重労働に従事させられるので、みるみるうちに体力が減耗していきます。

米軍の投降呼びかけ放送も聞こえたが、日本兵は、「あれはうそで、捕らえて殺してしまう虚偽宣伝だ」と説明したけれど、明らかに動揺している様子で、迫害を一段と強化し、残忍、冷酷な本性をむき出しにして軍夫を虫けらにも劣るほどに扱いました。

危険な夜間の食料収集も命じられたが、軍夫たちはひそかに喜んだものです。外部の状況を知ることができ、脱走のチャンスにもなったからです。

朝鮮人は日本人よりはるかに強い生きる力と意志をもっているのです、こうなると信じられないほどの勇氣をもち始めていたのです。ビクビクしているのは支配者の日本軍人であり、被支配者の朝鮮人はむしろ大胆でさえありました。生活能力にすぐれた朝鮮人は、巧みに草木をえり分けて取り、食べられる物を探す嗅覚を働かせた。日本兵との無言の戦争では、すでに朝鮮人軍夫が勝利していたのです。

いくら監視を強化しても逃亡者は続出する。「菓子を食べに行こう」という新造語も流行しました。米軍が落とした菓子を拾って食べたことに由来するが、脱走して捕虜になろうという意味です。

次第に軍夫の数が減っていくことにいら立った日本兵は、四月下旬のある日、山を下りポケットにさつまいもをしのばせて戻って来た軍夫を摘発し、それまでに住民の畑作物を掠めた者、食料収集を命ぜられ帰隊時間内に戻らなかった者など、七人の軍夫に銃殺刑を言い渡しました。

うしろ手に縛られ引き立てられて行く七人の後に、墓穴掘りを命ぜられた七人の軍夫がついて行きました。沈さん

もその一人です。深さ三〇センチくらいに掘った穴の前に立たされた七人に対し、指揮者の兵隊が「最期に言いたいことはないか」と訊いたのです。すると、年長の千有亀チヨン・ユクという軍夫が昂然と答えました。

「われわれは腹が減っていた。それなのに君たちは食料をくれなかったではないか。われわれは働くのはいい。どんなに働かされても我慢しよう。仕事なのだから。しかし、働けるだけの食料もくれずにただこき使ったのだ。われわれは心から君たちを恨む。腹が減っていたのだ」

刑死を前に言い放つ、その凄然な言葉に、兵隊たちは一瞬ひるんだ様子でしたが、

「朝鮮人は死ぬまでメシか」

と、憎々しげに侮蔑に満ちた悪態をつくると、生いもを取り出して千有亀の口へ押しこんだのです。

この軍夫処刑事件にショックを受けた沈さんは、もはやここに留るべきではない、脱走しようと決意し、親しい仲間とひそかに脱出計画をねり上げ、一四人の同僚と五月四日夜、実行に移しました。幸い日本兵にさとられずに成功し、翌朝、米軍ランチに救出されるのですが、沈さんはひどい栄養失調で視力が低下しており、海上を近づいてくるランチが見えなかった、と言っておられます。

こうして多くの軍夫は米軍捕虜となり、沖縄（一部はハワイ）の捕虜収容所で日本敗戦の日を待つ身となるのですが、徴発以来のこの間、多数の犠牲者を出しました。

慶山郡から連行された朝鮮人軍夫は三〇〇人余りと前に述べましたが、その中、「太平洋同志会」が確認した死亡者は四〇人。全部とは言いつれず、調査は難航しています。

今年三月一八日に帰国した私は、その翌日から厚生省援護局へ行き、死亡者名簿から氏名を確認しようとしまし

た。しかし判明したのは戦死一二人、戦傷死一人、戦病死二人で、「太平洋同志会」の確認数の半分にも足りません。しかも戦死者の中には、前述の処刑者が二人も入っているのです。復員時に各部隊は戦闘経過、死亡者の報告を行った、と聞きますが、この水上勤務中隊は朝鮮人軍夫について正確な報告をしなかったのではないかと思われます。あるいは処刑責任の追及を恐れて処刑事実の隠蔽を図り、どさくさ紛れに処刑者を戦死者の中にはめこんで報告したのだろうと思われまます。

さらに驚いたのは、これら処刑者も、その他の死没者とともに靖国神社に合祀されていたことです。「特水勤一〇三朝鮮人状況不明者名簿」の死没者欄には、「合祀済」という鮮やかなゴム印が並んでいました。植民地時代、日帝は朝鮮人に神社参拝を強要し、民族の憤激を買いました。その歴史的経験を反省することなしに、天皇崇拜と軍国主義のシンボルである靖国神社に朝鮮人を祀る非礼、侮蔑を憤らずにはおられません。

後日訪韓した折に、私は何人かの韓国人の友人にこのことを話しました。しかし、意外にも反応が鈍いのです。天皇崇拜と神社参拝を強制された彼らの屈辱感が消えてしまったのか、不思議でした。ソウルの友人はこう言いました。

「海野さん。彼らの大部分は犬猫のように棄てられたのですよ。たとえ靖国神社であろうと、一人ひとりの名前入りで死んだことが確認されているだけでもいいのです。韓国の民衆はそう思うのです」
返す言葉がありませんでした。靖国問題は私たち日本人の民族的責任の問題であることをあらためて痛感しないわけにはいきませんでした。

実は、昨年一月末、「太平洋同志会」の代表五人が沖縄を訪問しました。権丙卓教授と私も同行が許されました。

生あるうちに同僚が眠りつづける地を訪れ、魂を故郷に連れ戻そう、という彼らの宿願が沖縄大学の招請の形で実現したのでした。滞在費は沖縄県民のカンパでまかなわれました。那覇刑務所に服役中の在日韓国人からいち早く一万円が届けられ、関係者を感動させました。

彼らは慶良間に渡り、七人の軍夫が銃殺された処刑地跡で招魂祭を行い、土と化した亡友の骨を箱に納めました。また、沖縄大学の土曜教養講座に出席し、自己の体験を詳細に語ってくれました。予定の二時間が四時間におよび、教室を埋めつくした聴衆を釘づけにしました。市民たちが声もなく証言に聴き入ったのは、いままでも知らなかった事実が明るみに出されたことへの驚きであるとともに、太平洋戦最大の被害者であり、国内被差別者であるはずの沖縄県民が、「日本人としての沖縄県民」として植民地民衆に対しては、加害者・差別者の立場にあったことが問われていたからでした。もちろん証言者たちは、韓国人らしく節度をわきまえ、日本軍を激しく非難しても、住民から虐待されたことはない、と言い、温情には感謝する、とも言いつつ添えました。だが、本当にそうだったのか。軍夫の行動を日本軍に密告したり、住民の食料が盗まれたことに対し軍夫を処罰するよう要請したのは、やはり住民だという話もよくきかれます。琉球大学の岡本恵徳教授（近代文学）も、「そのことを語るにはある種の（加害者としての）苦い思いをしなければ語れぬという事情が、その背景にある」（『毎日新聞』一九八七年九月九日夕刊）と述べておられます。一八七九年（明治一二）の沖縄併合（琉球処分）以来、本土と差別されつづけ、いま、「皇土保衛」のための犠牲にされた彼らでも、朝鮮人に対する差別意識を超克することができなかったのです。沖縄県民でさえ、と言うべきではありません。本土人（ヤマトンチュ）も関東大震災における朝鮮人虐殺体験をもっていることを忘れるわけはいきません。

ほんとうに苦い、重い問題で、できるものなら避けて通りたいことですけれど、率直に民族的加害の事実を明らか

にし、民族的責任を自覚することによって、はじめてアジア民衆と共有できる歴史認識をうることができるのだらう
と思います。

沖繩から持ち帰った土を納めた慰霊碑が、慶山郡百合公園の丘に建ち、「太平洋同志会」の人びとは、権丙卓教授
と私の共者である『恨——朝鮮人軍夫の沖繩戦——』（河出書房新社刊）が出版されたことを喜んでおられます。沖
縄県民との交流も始まりました。しかし、靖国問題や日本人の民族的責任の問題を考えると、これで彼らの「恨」は
解けたのだろうか。今でも私の脳裡に、その疑念がつきまとい離れようとしません。

（一九八七・一二・一二 駿台史学会一九八七年度大会）